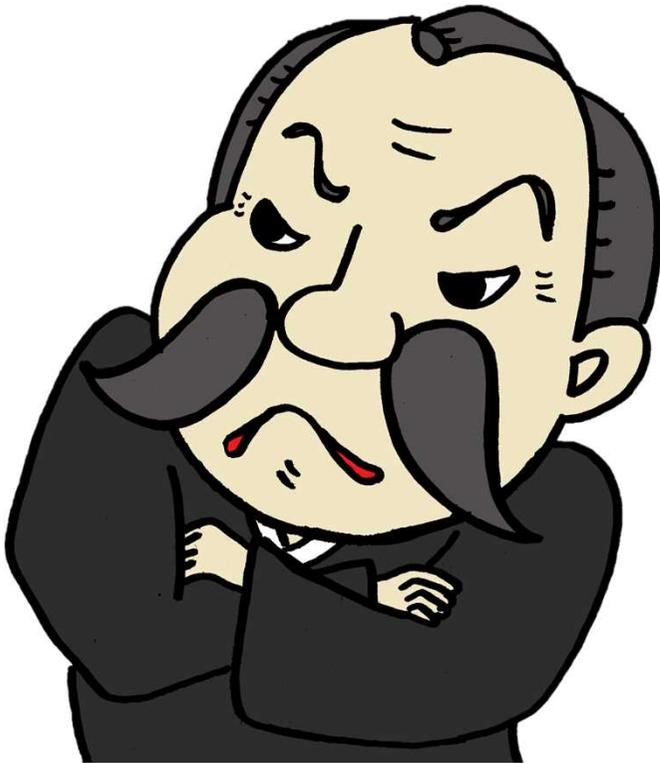


つがるの昔っこ30 (昔話)

律軽のひげ殿様② (律軽舟)



国土交通省 東北地方整備局
岩木川ダム統合管理事務所
イラスト：やざわ ゆな
カラーリング：みやかわ みなみ

津軽のひげ殿様、お江戸で暮らしてらど。
ある日、将軍様の御前で馬術大会開かれだど。

この時、将軍様のお抱えの某（なにがし）の蔵人（くらんど）ず人居でせ、この人、乗馬の名人でせ、青竹乗りてす、なもかも皆、たまげるんた芸とうやって見へだど。それあ、池の上さ、こっちの岸がら中の島まで青竹二本渡してせ、その上とば馬コさ乗って歩いて行って、中の島でまわれ右して、又戻って来るてす芸とうであだど。

これば見でら大名だの家来達あ『あつらあ』『おろー』て皆感心してまたど。

したばって、又、ひげ殿様だけは面白くねんた面（つら）して『フフン』て笑ったど。

将軍様、それ見でしゃくにさわって
『津軽公、如何致した』て聞いたずおん。



情張り殿様、又あの良ぐねえ癖出してよ、

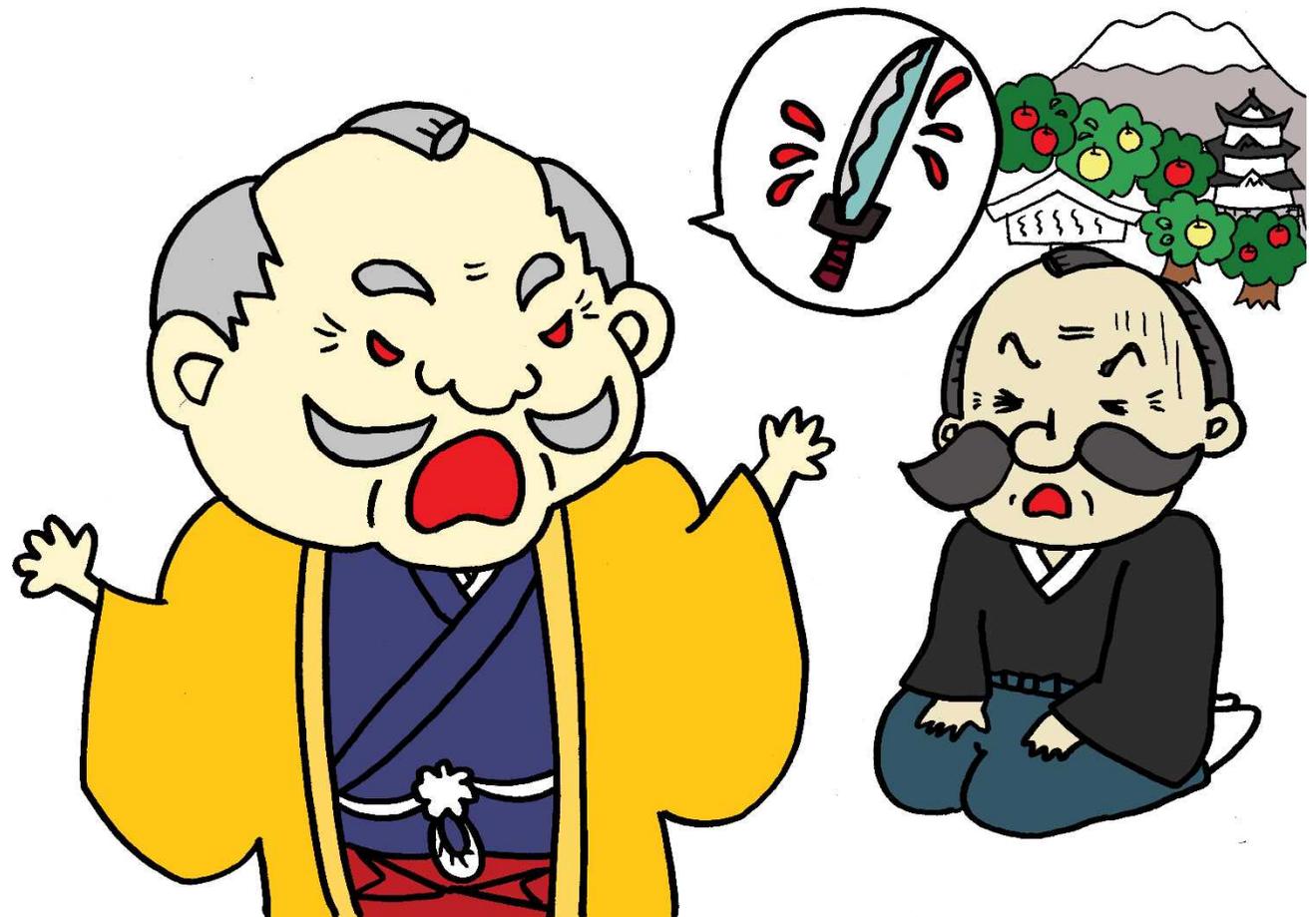
『私の家来には、一本の竹の上を馬で渡って、途中でぐるっと向きを変えて引き返してくる馬乗りの名人がおります』

てホラを吹いだど。



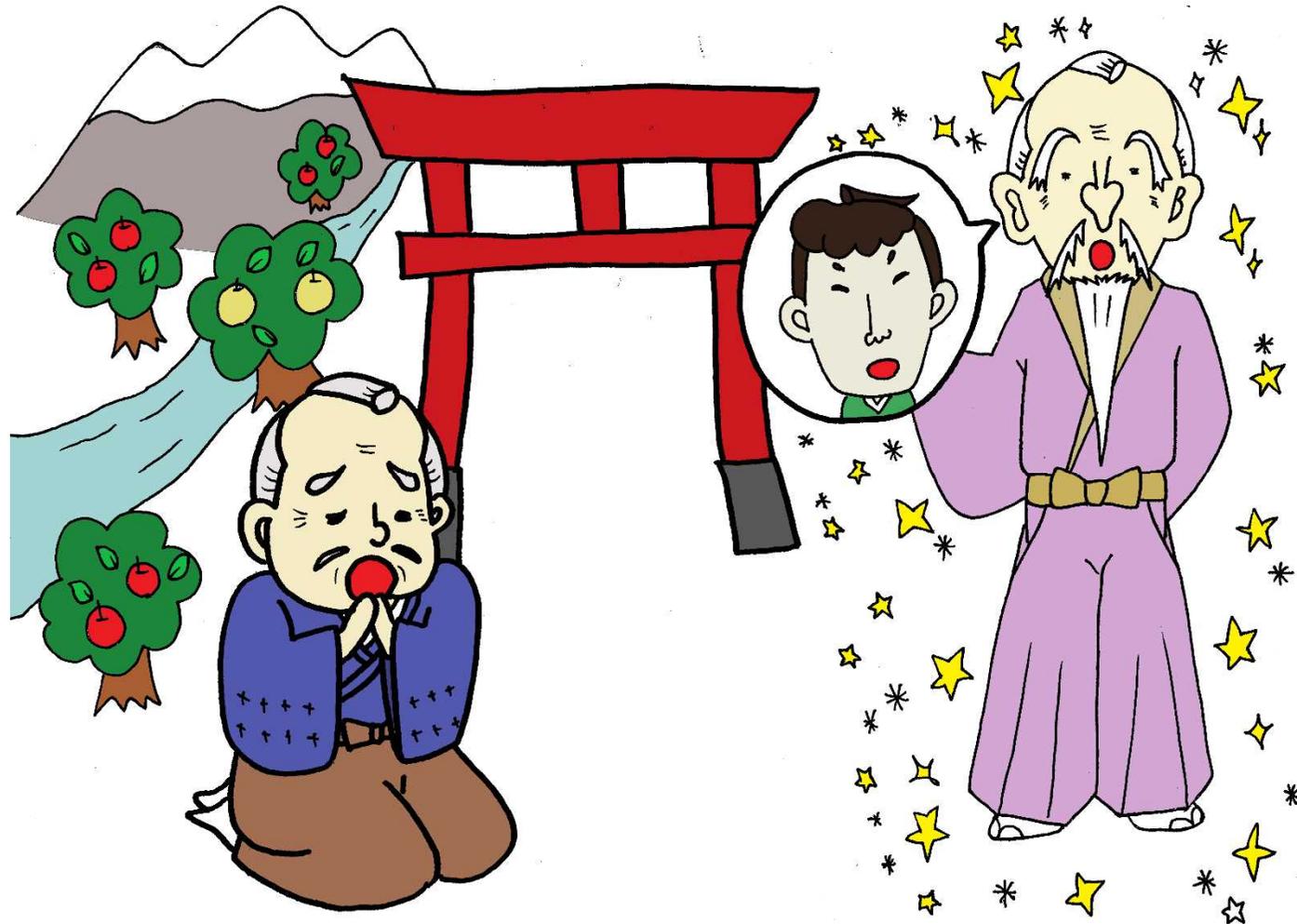
将軍様、それ聞いて腹ムカムカどなって、
『よし、それならば、その家来を江戸に呼べ。
余の面前で馬の曲乗りをさせてみよ。今から五十日の期限を与える。
もし、それが出来ぬ場合は、そちに切腹を言い渡す』て、ギリッと命じだど。

さあ、津軽公『これあ、又余計喋り（よげしゃべり）した』と思たども、もう仕方ねえ。
国さ早馬飛ばせで、乗馬の名人ば探して連れで来いて言てやったんだど。
さ、津軽ではこの話聞いて大変だ騒ぎになった。
国中さ布令（ふれ）出して、馬の名人探したども、青竹渡れるんた馬乗りだの居るわけねえ。



ご家老も青くなって、今度もまだ、どっすもなねぐなて、赤倉様さお願いに行ったんだど。
『赤倉様、赤倉様。何卒何卒津軽ばお救いください』
て必死に頼んだずおん。

三七二十一日の満願の日、白いひげを垂らした赤倉様あらわれで
『右馬介（うまのすけ）を江戸へやれ。あとはわしが助けてやる』と言ってスツと消えだんだど。



ご家老は右馬介という家来ば知らねがったとごで探さへだきや、連（つ）で来らえだ男あ、まほらっとして、じゃまこちペーただ、身分の低い侍であたど。

ご家老『こら、右馬介、お前馬さ乗るのあ上手だが？』て聞いだきや、『我、馬さ乗った事ごえへん』て答えだど。

何かのまちがいでねべがど、もっと探さへだけど、ご家中さ右馬介てす名前の者あ他に居ねがったど。

みんな不安であったけど、赤倉様のお告げだ。この侍ば江戸さのぼらせだ。

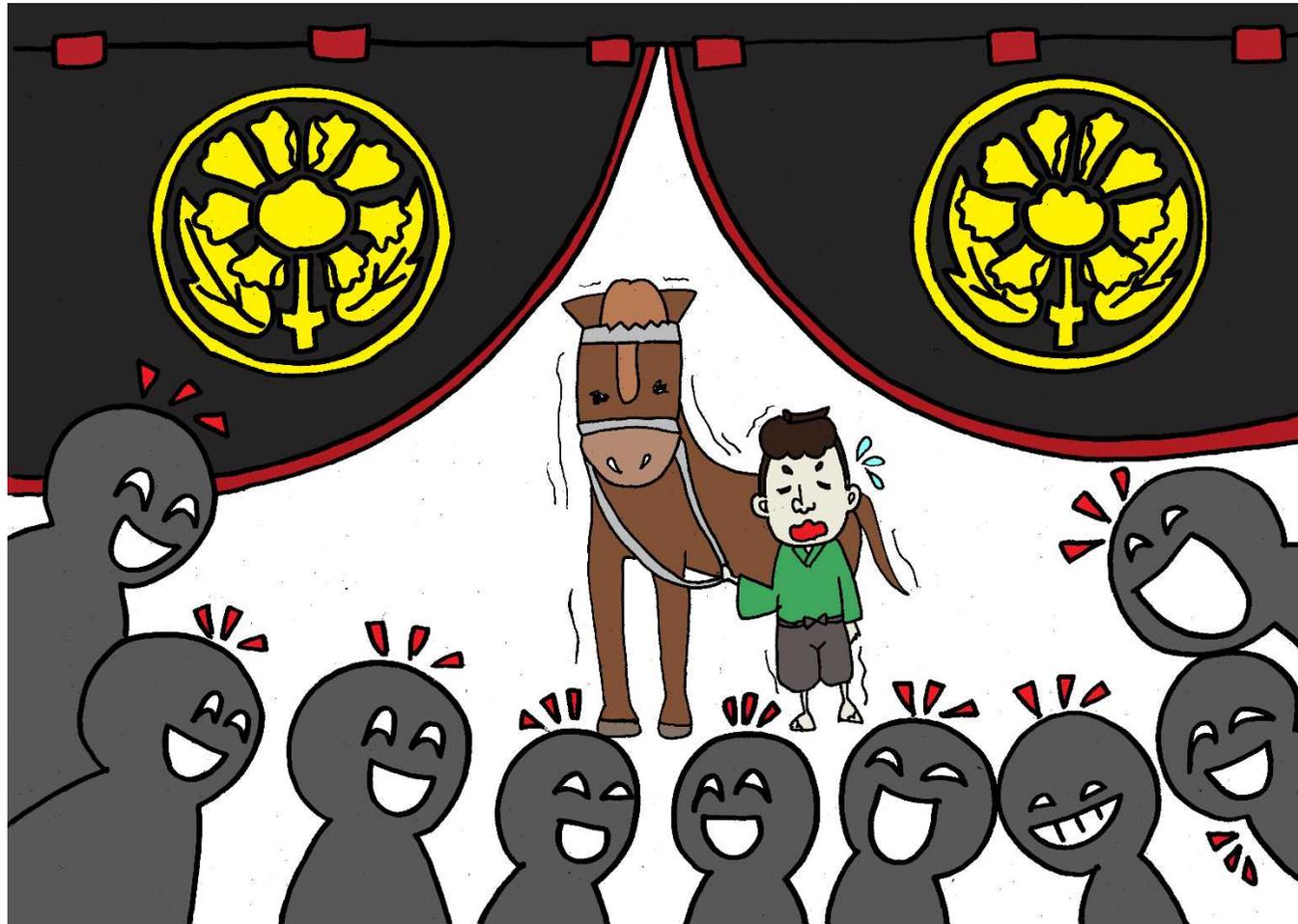


右馬介、江戸さ着いで、その晩（ばげ）、津軽屋敷の一室で寝でらきや、夢さ赤倉様現れで『わしは津軽の赤倉山に住む神である。わしの言う通りやれば、何も心配する事はない』て言（し）てがら『馬に乗ったら先ず目をつぶれ、そして馬が青竹に足をかけたら、目をあいて前を見ろ。わしは目印の金の御幣を出しておくから、それから目を離すな。その通りにやると成功間違いなしじゃ。ゆめゆめ疑うなかれ』と言ったかと思たきやスツとお姿が消えて、夢さめだど。



さ、いよいよ今日は、将軍様の馬術大会だ。
津軽の殿様、どした名人ば連で来るんだべと将軍様も大名、家来達も興味津々どして坐てあたど。
見物人も山だけんたに集まってらずおんな。

津軽公の番コ来たど。
太鼓ドーンドーンて鳴って牡丹の紋入ったあん幕上がたきや、そっからではて来た侍ずのあ、
ジャマコちペーたで、まほらっとした男で、おまげにブルブルどふるえでるんだど。
馬コもヨタラヨタラてす年寄り馬で、おまげに脚も悪いんだがさ、ガッカラモッカラ、ガッカラモッカラて歩（あさ）いてるガンジョ馬であたど。



右馬介、鞍さしがみついで、やっとそのガンジョ馬の背中さ上がったど。
見でら人達あ、そのウスケネタラだ騎手（のりて）ど馬コ見くらべて、あんまりおがしくて、
どーっと笑ったど。



ところが、その馬コ、青竹さ一歩脚かけだきや、急にシャキラッとして、ビンビンどなって『はいよう』て言(す) 騎手(のりて)の号令に合わせて、スタラスタラど歩き始めだんだど。

その時、騎手(のりて)の右馬介の眼(まなぐ)さ、赤倉の神様のお告げにあった、金の御幣があざやかに入って来て、パカッパカど歩く脚先さもギリッと力入(は)て、青竹ば半分渡って、その場でくるっとまわれ右して、無事戻って来たど。



見でら人達あ、あまりの事に信じられなくて口バツカラとあいてらずおんな。
したがど思たきや、『ウォー』てすため息ど叫び声出はて来て、大喝采になつたど。

将軍様も『これは見事な業じゃ。あっぱれ、あっぱれ』
てほめだど。



ひげ殿様は内心ハカハカで、胸ダクダクしてあたばて『よぐやった。でかした、でかした』て右馬介とばほめでがら、くるっと將軍様の方ば向いで、『津軽にはこうした馬乗りは何人もございます』て言（し）たんだど。

なんぼエフリコギだ殿様であつたんだべなあ。

とっちばれ

